

# 白川研究所 号 8



武田鉄矢氏への「名誉漢字教育士」授与式の様子

目次 ◆ i n d e x

就任の挨拶	2
『漢字学研究』 第一号の刊行について	2
服部 健二	
立命館土曜講座特集「中国の古典歌謡」の開催	3
荻原 正樹	
加地 伸行	
福井ライフ・アカデミー漢字文化講座 「白川文字学を学ぼう」の講演	4
芳村 弘道	
学生諸君との『詩経国風』の勉強会(続)の報告と 二〇一三年度の予定	6
高島 敏夫	
災害復興支援「漢字で元気に」活動報告	7
久保 裕之	
二〇一二年度活動報告	8
立命館白川静記念東洋文字文化賞の 選考結果について	12
漢字教育士資格認定講座のインターネット開講について	14
「名誉漢字教育士」授与式・追贈式の実施について	15

第 8 号  
発行  
13.7.16

立命館大学  
白川静記念東洋文字文化研究所  
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1  
電話 075-466-3470  
Mail toyomiji@st.ritsumeai.ac.jp  
URL http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/  
k-rsc/sio/index.html

## 就任の挨拶

所 長 服 部 健 二



私自身は近現代の哲学を専門としてきたのですが、かつて白川静先生のお仕事について、私の恩師の一人で白川文字学を学んでおられた西川富雄先生と雑談したことがありません。西洋思想史でいえばどういう人

になるのかという話題でした。近代哲学者のなかではフランスのデカルト（一五九六—一六五〇）が近代の機械論的自然観の哲学的基礎付けをした人物とされますが、それに対して歴史科学の哲学的基礎付けをした人物としてイタリアのヴィーコ（一六六五—一七四四）が挙げられます。ヴィーコのような思想に通じるのではないかということで見が一致しました。

かれは象形文字や象徴文字や俗語といった言語を手掛かりに人間のすべての行為（習俗、法律、戦争と講和、同盟、通商など）の認識を目標とした言語文献学を展開することによって、歴史を支配する神の摂理という永遠の理念史を解明しようとした思想家でした。

西川先生とお話したのはちょうど白川先生の『字統』（一九八四年）が出版された二、三年あとのことでしたから、象形文字としての漢字の最初の形とその意義とを明らかにすることによって、古代社会の祭儀を中心とした文化世界を現出させるこの字書に、二人とも魅了されていました。漢字文化圏の人文科学の基礎づけがそこにあるという思いでした。かつての白川先生をめぐる西川先生との会話を思い出し、全力を尽くす決意しております。

（学校法人立命館副理事長）

## 『漢字学研究』 第一号の刊行について

副 所 長 加 地 伸 行

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所では、白川学のさらなる展開として、文字学について、当研究所が日本における研究の中核となりたいと考えていた。

幸い、木村秀海・関西学院大学教授を中心とする殷周史研究会が関西で研究活動をしていたので、木村秀海・末次信行・大形徹各氏と私との会合の結果、同研究会を漢字学研究会と改称し、当研究所の部会とし、発足することとなった。

その際、白川先生の大作『金文通釈』の続編として新しく単行本『金文通解』を、将来、逐次刊行することを目的として、その達成のために、漢字学研究会は会誌を行ない研究を続けることとなった。

研究会のその成果をまとめ、社会に発信することを目的として、『漢字学研究』を創刊した。以後、毎年、本誌を刊行する。

広くは中国古代の研究、限っては文字の研究は、地道な領域であり、研究者も多いとは言えない。それだけに、本誌は同研究者たちの拠点となるであろう。

学問に国境はない。まして所属機関による分別など学問においてはほとんど意味がない。研究環境の厳しい今、当研究所は、漢字学研究会を可能な限り後援し、本誌『漢字学研究』連載稿に基づく『金文通解』第一冊刊行の日の近からんことを期待している。



## 立命館土曜講座特集

## 「中国の古典歌謡」の開催

運営委員 萩原 正樹

昨年度の特集「白川静の世界」に引き続き、当研究所では今年度も七月（第三〇二二回〜第三〇二四回）に土曜講座「中国の古典歌謡」を開催した。白川静先生の学問は、甲骨金文学・中国神話学・中国思想・中国文学・日中比較文学など多岐にわたるが、このうち中国文学研究については特に詩経を中心とする古代歌謡の研究において大きな成果を挙げられておられる。その詩経に始まる中国の古典歌謡がどのように変遷、発展していくかを、時代の流れを追いながら概観していこうとするのが今回の連続講座である。以下にそれぞれの講演の概要を紹介し、立命館土曜講座の特集「中国の古典歌謡」開催の報告としたい。なお七月七日には講演に先立って、加地所長の挨拶と第六回白川賞授賞式が開催された。

## ◆「詩経の中の愛の形―恋歌を中心に」(七月七日)

高島 敏夫(当研究所客員研究員)

『詩経』は日本の『万葉集』に相当する古代歌謡集であるが、儒教の古典として読まれてきた伝統があるため、堅いイメージで捉えられがちであった。しかし実は『詩経』にはたくさんの恋愛詩が収められており、『万葉集』のような大胆な愛情表現も見られる。ただ古代特有の隠語や隠喩で表現されることが多いため、気付かれにくかっただけなのである。二十世紀以降の詩経研究はこのようなレトリックに注目して『詩経』の愛情表現の世界を次第に明らかにしてきた。その代表格が白川先生の詩経研究である。白川先生の学問の出発点は詩経研究であり、その先生の研究を踏まえながら、詩経に見える恋歌の世界の一端について紹介を行った。

## ◆漢魏六朝の楽府―民衆の歌(七月十四日)

石井真美子(本学文学部准教授)

「楽府(がくふ)」とは、もともと漢の武帝の頃に設けられた音楽所の名称である。楽府では宮廷の祭祀に関わる歌を扱うほか、民間歌謡を集めて風俗人事を知り、政治に役立てるといふ職務もあった。やがてそこで採用された民間の歌謡や新しく作られた曲が「楽府(がふ)」と呼ばれるようになった。楽府は最初の作者によって主題と楽曲が決められ、後世の人々はその主題と楽曲を踏襲しながら同じ題で「替え歌」を作った。そして楽曲が廃れてしまうと主題のみを引き継ぐ詩になった。これら「楽府」の中から恋愛に関するものと庶民の生活を歌ったものをいくつか紹介し、民が楽府に託した思いを考えた。

## ◆唐宋詞―純粹なる抒情の世界(七月二十一日)

萩原 正樹(本学文学部教授)

詞というジャンルは、中国の唐に始まり、宋の時代に隆盛した韻文であるが、日本では一般にあまり知られていない。だが中国では教科書にも載っているポピュラーな文学様式である。詞は音楽に合わせて歌われた歌辞文芸であるため、形式と内容両面においていわゆる漢詩(古詩や近体詩等)とは異なるさまざまな特徴を持っている。その特徴について概説したあと、すぐれた作品とその魅力を紹介した。

## ◆元明の散曲―甘やかな恋の歌(七月二十八日)

平塚順良(本学衣笠総合研究機構ポスドクトラルフェロー)

元代の中国では散曲という新しい歌謡文芸が大流行した。その流行は、その後王朝の交代を経ても絶えることなく続いた。そのメロディはすでに失われてしまい、聴くことができないが、その歌詞はたいへん甘やかに恋を歌いあげており、今にも当時のメロディが聴こえてくるような錯覚に襲われることもある。今回はラブレターに関する歌をまず紹介し、夜明け間近の恋人たちについて歌った作品を、いくつか紹介した。

## 福井ライフ・アカデミー漢字文化講座 「白川文字学を学ぼう」の講演

副所長 芳村 弘道

白川静先生の御出身地である福井県と本研究所は漢字教育などにおいて連携した取り組みを継続しているが、二〇一二年一〇月から一二月にかけて、本研究所の三名が福井県生涯学習センターの依頼を受け、漢字文化講座「白川文字学を学ぼう」の講演を担当した。一〇月が福井市内のユー・アイふくい、十一月・十二月が小浜市内の若狭図書学習センターを会場とし、いずれも午後一時半から三時までの開催であった。各担当者の執筆による講演内容の概要をここにまとめ、今回の出張講演の報告としたい。

### ◆「白川静先生の学問形成」(二〇月六日・十一月二日)

芳村弘道(本学文学部教授)

白川静先生は「白川学」と称される独自の壮大な学問を構築された。

この講演では、日本と中国の古典文学に強い関心を抱き読書された青少年時代から学問の道を進まれた壮年期までの白川静先生の足跡をたどり、「白川学」が形成される一端を解説した。十三歳から十七歳頃に至る時期に『詩経』『楚辞』を読まれ、また『三体詩』『唐詩選』も愛読され中国文学に目覚められた。同時に郷里福井の幕末維新の歌人である橘曙覧の『万葉』のうたぶりに魅せられ『万葉集』にも深い関心を寄せられ、『万葉集』と同じく古代東アジアの歌謡集である『詩経』との比較研究を志された。先生が、すでに青少年期に古代の日本と中国とを合わせて考察する、いわば「東洋」という広範な学問意識を有されたことは注目すべきである(ちなみに幕末において「東洋」に対する「西洋」が

「芸術(科学技術)」を主体とする世界として意識されていたことを理解するため、福井の橋本左内の漢詩「西洋雜詠」を紹介した。

二十三歳で立命館大学に入学され、先生は本格的に学問の研鑽を積まれたが、当時、中国の学問は実証的研究に没頭する「清朝考証学」の時代を経て、経籍に記された古伝説の信憑性を批判する顧頡剛らの「疑古派」と甲骨文字・金文資料などの考古資料をもって文献の内容を証明する王国維らの「考古派」の学問が盛んであった。先生は、「疑古派」の学術誌「古史弁」も精読されたが、王国維の学問に強く影響され、卜辞・金文の研究に進まれた。また立命館のある京都では「京都支那学」が起こっており、内藤湖南などによる従来の「漢学」にとられない新しい学問が開示していた時期であった。先生は日中の最新の学問を吸収され、また甲骨・金文といった新出の文字資料を駆使し、古代中国の研究に邁進された。先生の学問は古代文字の研究に止まるのではない。甲骨・金文学は『詩経』研究の一環であり、それは『万葉集』との比較研究のためのものであり、さらに言うならば「東洋」を知るための研究であった。おおよそ以上の内容を先生の『回思九十年』などに依拠してお話し申し上げた。

なお九月二八日から一〇月二八日まで、福井県立図書館「白川文字学



福井県立図書館「白川文字学」の室

の室」で本学図書館「白川静文庫」収蔵の書籍・資料類の一部を展示した「白川静文庫展」が開かれており、一〇月六日の講演後、展示解説を行った。聴講者の大半が引き続いて参加され、先生の自筆原稿や書き入れ本、手沢の唐本古籍などに接して、「白川学」の形成に改めて理解を及ぼされた様子であった。

### ◆「白川静『甲骨金文学論叢』の言語学的意義——師と史の字源論を中心に」(一〇月二〇日・二月)

高島 敏夫(当研究所客員研究員)

福井での講演は、二〇〇七年に福井県立図書館主催の「白川静先生没後一周年」の行事として企画された講演以来のことである。その時は先生の思い出を語りつつ、私自身の今後の仕事についても言及するような内容だった。その後も白川文字学について話す機会は多かったが、いまひとつ飽き足りないものを感じていた。それは、白川文字学の説明を、主に先生の言葉を用いて述べるに留まっていたからではないかと思う。先生ご自身がこういう言い方をされたわけではないが、白川文字学は単なる文字学ではなく、伝統的な訓詁学の延長線上に出来たものである。これを私は、文字学の体系を内包する訓詁学と呼んでいる。このような性格をもった文字学を言語学の観点から捉え直すとうなるだろうということを考えていたのである。いわば新しい切り口からの説明である。

今回援用したのはソシユール言語学の「共時言語学」と「通時言語学(歴史言語学)」という観点である。白川先生の学問は前述したように伝統的な訓詁学の方法によるものだが、同時代資料としての甲骨文・金文を徹底的に読み込むことを通して、その時代の語義を追究するという方法を貫かれた。その方法は、単に字形だけで意味を判断するのではなく、語の用例を徹底的に分析することによって語義を絞り込み、さらに字形の観察も交えて字源を考えるとというように、多方面からアプローチするものだった。甲骨文に示された全ての語の用法を念頭においている

わけであるから、文字(語)の説明にもそれが随所に出てくる。このような方法はソシユールのいう共時言語学に相当するものである。

一方、文字は言語を記したものであるから、社会的な変化とともに語義も変化することがある。甲骨文の時代から金文の時代への移行は、殷王朝から西周王朝への移行であるが、この時代には大きな社会体制の変化があった。語(文字)の意味もそれに対応して変化する場合がある。

先生はこのような語義の変化をも緻密に観察する人であった。そしてそれが字源を考える場合にも出てくるのである。こうした語義の変化を観察する方法を「通時言語学(歴史言語学)」と呼んでいる。白川文字学の体系がこのようなアプローチを通じて構築されたものであることを知る人は意外に少ない。今回はこうした内容で講演をしたのである。

### ◆「白川静先生の古典文学研究」(一〇月二八日・十一月三日)

萩原 正樹(本学文学部教授)

白川静先生の学問は、甲骨金文学・中国神話学・中国思想・中国文学・日中比較文学など多岐にわたり、広大かつ深遠である。この講演は先生の中国古代文学研究についてであるが、この中国古代文学研究に限っても先生の研究は詩経、楚辞、樂府、古詩、漢賦、六朝詩など広範に及び、またそれぞれに深い洞察がひそんでいて、その全貌を限られた時間で話すのは困難である。そこで今回は、先生の詩経研究について取り上げ、特に旧来の説と異なる先生独自の学説であるかという点に重きを置いた内容とした。先生の詩経研究は、これまで連続と続いてきた詩経学を一変する、きわめて革新的な研究であった。先生は詩経詩篇のすべてについて訳注を残しておられるので、これも紹介しながら先生の詩経研究の特色を紹介した。先生の訳詩は、学問的な厳密性に裏付けられていることはもちろんであるが、文学作品としてもたいへん味わい深いものがあり、その文学性は、おそらく先生が若年の頃から最晩年に至るまで親しまれた短歌の制作と関連があると思われる。

## 学生諸君との『詩経国風』の勉強会(続)の 報告と二〇一三年度の予定

客員研究員 高島 敏夫

昨年度に続いて、学生諸君との『詩経国風』の勉強会を実施しました。昨年度の報告は前号で記しておきましたのでご参照下さい。

去年この会を始めたのは、白川先生の文章を今の学生がいきなり自力で読むのは難しいので、少しでも馴染めるようにという趣旨で始めたものです。テキストは先生の『詩経国風』を使用しました。『詩経』は先生の研究の出発点であり、そこから文字学へと突き進んでいかれたわけですから、一種の追体験をすることにもなります。

今年度は『詩経国風』の中の「鄭風」を読みすすめました。昨年度読んだ「陳風」もこの「鄭風」も恋愛詩が多く収められています。恋愛詩は大体歌垣のスタイルを取っていますので、古代の男女が歌謡という形態でどのような愛情表現をするのかということが眼目になります。また古代特有の隠語や隠喩もしばしば見られます。そうしたことを押さえながら詩篇の内容を読み取っていくという方法で進めていきました。主として白川先生の記述に沿って進めるのですが、時にはそこから更に一歩踏み込んで読みを深めることができましたところもありました。その方法も先生とは別のやり方をするということではなく、解釈の対象にしている語の用例をできるだけたくさん集めてきて、用例の分析から論理的に絞り込んでいって結論を導き出すという方法を探るようにしました。このような方法は、白川先生の研究方法を継承するものだと思いますので、「これが白川静の方法だ。」などと眩きながら進めたものです。先生が文字学の体系を構築するという大仕事を成し遂げられたために、とか

く世間では文字学者と見なされがちですが、実際には文学の訓詁学的な研究の中から文字学の体系が生まれていったということを、こういう形で追体験してもらえようになっています。

中には二年目の学生も入っています。二年目にもなりますと、段々作品の分析力にも磨きがかかってきます。なかなか鋭い読みを披露してくれることも何度かありました。こうした分析力は『詩経』を読む時だけに発揮されるのではなく、他の文学作品や文章を読み取る場合にも、目に見えない形で有効に働くようになります。こうした読み方を通じて白川先生独特の表現にも次第に馴れていってくれたようで、難しいと感じていた『字統』も以前よりかなり読みやすくなったと感じているようです。

勉強会で分析力がある程度培ってにおいて、次は「研究」の段階へと進まねばなりません。来年度も『詩経国風』の勉強会を継続しますが、それだけでなく、一つのテーマをもった研究会といえますか、問題意識をもった研究会を始めたいと思っています。現在なお構想中ですのでまだ具体的に書く段階ではありませんが、白川先生が築かれた文字学を一つの踏み台にして次の段階に踏み出そうとしています。甲骨文の文字構造の整理が一段落したので、今度はそれを踏まえて金文の文字構造の研究に進むことを目論んでいます。西周時代の金文は殷代に誕生した甲骨文の構造をそのまま継承していますので、それぞれの文字の成り立ちを考える際にもとても役立つことができました。ただ、甲骨文の文字構造の整理をした後で、金文を眺めてみると、甲骨文には見られなかった様々な現象が字形に現われています。甲骨文が殷王朝の文字、金文は西周王朝の文字ですから、そこに差異が見られるのは当然のことですが、その差異の示唆する意味を分析していこうというわけです。

## 災害復興支援 「漢字で元気に」活動報告

文化事業担当 久保 裕之

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行なおうとする試みを始めた。二〇一一年一〇月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、好評を博し、二〇一二年度には活動の場を岩手県大船渡市にも広げた。

まず同年一〇月七日・八日に、福島市の福島テルサにおいて「福島漢字探検隊―漢字あそび大会二〇一二」を開催した。昨年に引き続き、福島大学人間発達文化学類・澁澤尚研究室の協力を得て開催し、市民を無料招待した。漢字カルタやすごろくなど漢字をテーマにしたゲームや、



「福島漢字探検隊―漢字あそび大会2012」

「漢字クイズ」「画数ビンゴ大会」などのイベントを行った。漢字かるたや双六などのゲームを楽しんだり、甲骨文や青銅器のレプリカ、白川名譽教授の写真パネルを見学するなど、会場では親子で楽しむ姿が見られた。「親子で『本気で』ゲーム等楽しめた」(大人)「みんなでなかよくできながら、漢字が覚えられた」「漢字かるたでお兄さんやお姉さんがいろいろ教えてくれた」(小学生)

など、世代を超えたコミュニケーションが行われた。会場には二日間、約一〇〇人の来場があり、地元紙の『福島民友』の取材も受けた。

同月九日・十日には宮城県角田市を訪問した。震災前まで「東京漢字探検隊」が毎年春に訪問し「農業と宇宙」をテーマに体験学習を行っていたところである。今回は二日間で小学校四校(横倉小学校・北郷小学校・枝野小学校・角田小学校)を訪問し、体を使って漢字を表現する「漢字ジェスチャー」授業を行った。

同月十二日から十四日にかけては、岩手県大船渡市を訪れた。立命館大学が災害復興に向けた連携協力に関する協定を締結しており、立命館学園の教職員・学生生徒児童らが様々な支援活動を継続的にしている。

今回は、ゲームやクイズを通して楽しく漢字と触れ合うことを目的に「大船渡漢字探検隊―漢字あそび大会」と題して、福島と同様のイベントを開催、ここでも市民を無料招待した。今回は、災害復興支援室が派遣した後方支援スタッフの学生八名が運営サポートとして参加した。会場では、カルタやすごろくなどの各コーナーに学生がサポートに入り、参加者と交流した。「漢字クイズがおもしろかった」(小学生)「年齢に合わせた遊び方があってよかった」「スタッフの方々が親切に対応してくださった」(大人)などの感想があった。会場には二日間で約一四〇人の方が訪れ、地元紙の『東海新報』のほか『岩手日報』『岩手日日新聞』の取材があり大きく報道された。また市民から「立命館の方々がよく来てくださる」との声を多数聞き、立命館学園の支援が市民にも知られていることが実感できた。

今年も秋に同様の取組を引き続き行う計画を進めている。「大学だからできる復興支援活動」の一つとして継続的に取り組んでいきたいと考えている。

# 二〇一二年 度 活 動 報 告

## 文 化 事 業

### 体 験 型 漢 字 講 座 「漢 字 探 検 隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのものをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。二〇一二年度は全国七都府県で十七回開催され、延べ約一三〇〇名の参加があった。

本年度は新たな開催地として、香川県さぬき市・三豊市・高松市と岩手県大船渡市が加わった（大船渡市等での事業については別項に）。筑波山神社（茨城県つくば市）での活動が『神社新報』紙に紹介され、香川県内の神社での「漢字探検隊」連続開催が実現した。

また二〇一二年三月に開催された「第三四回京都漢字探検隊―漢字あそび大会」では、古代文字で自分の名前を書いてもらうコーナーや「漢字クイズ」「画数ビンゴ」等のイベントが人気であった。また昨年開催して好評を博した「漢字ラリー」を開催した。「八朔」<sup>はつさく</sup>「刷子」<sup>はらし</sup>等漢字で書かれた商品の札を正しく読めるとスタンプがもらえるもので、参加者は商店街の方々と触れ合いながら、ラリーや買い物を楽しんでいた。

「漢字探検隊」のこれまでの通算開催回数は九一回を数え、二〇一三年度中には一〇〇回を達成する見込みである。

地域		実施年月																テーマ	講座名	参加者数	場所
岩手	福島	香川				茨城・つくば				東京	滋賀・草津		京都								
1	2	3	2	1	7	6	5	4	3	16	4	3	34	33	32	31					
2012・10	2012・10	2013・3	2013・3	2012・7	2012・12	2012・9	2012・7	2012・5	2012・4	2011・7	2012・12	2012・5	2013・3	2013・1	2012・9	2012・5					
		神	神	神	人体	農業	神	植物	酒造り	数	道具・家屋	水棲動物		人体	人体	動物					
漢字あそび大会	漢字あそび大会	神と漢字	神と漢字	神と漢字	漢字ジェスチャー大会	食と農と漢字	神と漢字	植物と漢字	お酒と漢字	数と漢字	草津宿で漢字と出会う	琵琶湖で漢字と出会う	漢字あそび大会	② 漢字ジェスチャー大会	① 漢字ジェスチャー大会	動物園で漢字と出会う					
140	100	32	50	50	50	65	65	60	30	20	31	62	320	94	20	99					
リアスホール（大船渡市）	福島テルサ（福島市）	三谷八幡宮（高松市）	浪打八幡神社（三豊市）	富田神社（さぬき市）	吾妻交流センター	食と農の科学館	筑波山神社	筑波実験植物園	稲葉酒造場	フォレスト本郷	草津宿街道交流館・草津宿本陣	滋賀県立琵琶湖博物館	立命館大学朱雀キャンパス	立命館大学朱雀キャンパス	立命館大学朱雀キャンパス	京都市動物園					



漢字ラリーで「行灯」の読み  
に挑戦する親子



神と漢字



動物園で漢字と出会う



漢検漢字教育サポーター育成講座

### 学内他組織との連携事業

二〇一二年八月には、立命館大学教育学部教職教育課が主催する教員免許状更新講習として「漢字をどう教えるか」を開講し、全国から八十余名の参加を得た。

同年一〇月下旬から一月初旬の一週間には、同じく国際平和とミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日特別企画」を本年も開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

また同年一月には、立命館大学父母教育後援会が主催する学生保護者向けの京都文化学習ツアーである「アカデミック京都ウォッチング」に「白川文字学―漢字で巡る京都」と題したコースを昨年度に引き続き開設、異なった視点での京都観光・学習として好評を得た。

### 他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会とは「漢字教育士」養成講座事業

の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の活動広報や情報交換等が活発に行われている。神戸新聞文化センターでは「白川静の世界―漢字を楽しもう」を昨年度に引き続き開講した。

### 福井県との連携

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内全域で研修や学習会が開催されている。当研究所からは、この事業の中枢機関である福井県教育研究所に研究会講師として津崎幸博・白川研客員研究員を派遣するほか、県生涯学習センター主催の「白川学を学ぼう」へ出講、二〇一二年九月から十月にかけて「白川静文庫」の出張展示を行った（詳細は別項に）。また福井大学での夏季集中講座も開催され、当研究所から講師を派遣した。県教育委員会からの委託事業である「福井県漢字学指導者養成講座」養成講座は二年間にわたって長期休暇中に集中講義の形で行われ、二〇一三年三月に三七名が修了した。

### 滋賀県草津市・兵庫県朝来市との連携

びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学校にて漢字・計算・英語の三検定の受検に取り組みようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が二〇一一年度から始まり、二〇一二年には滋賀県立琵琶湖博物館と草津宿街道交流館および草津宿本陣で開催した。二〇一三年度は、活動の場を小学校に移して行うこととなっている。

また、兵庫県朝来市和田山公民館での市民講座は二〇一一年度から始まり、五月から一二月まで連続開催され、座学の他に同年十一月には同市内の竹田城下での「漢字探検隊」を開催した。二〇一三年度も引き続き市民講座へ出講する。

### 白川文字学の普及者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りは五年目を迎え、ネットワーク相互間での連携は盛んになっている。

学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会（学力研：小学校教員を中心とした自主学習組織。ここでの実践から「百マス計算」などが生まれた）二〇一二年八月の全国大会での発表を行った他、同組織の中にある「家庭塾」の講師に招かれた。

出張講座：「漢字を楽しむ会 遊」（茨城県つくば市）主催の「白川静と東洋文字文化の世界」講座、広島国語教育研究会漢字教育研修会や香川県女子神職会研修会に招かれた。

伊東信夫氏（漢字研究者。『漢字が楽しくなるシリーズ』（太郎次郎社エディタス刊）や『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界シリーズ』（スリーエーネットワーク刊）の著者）を「京都漢字探検隊―漢字あそび大会」に招き、講演などを行った。また小寺誠氏（漢字教育家。元京都府教員。『白川静式小学校漢字字典』（フォーラム・A刊）著者）を研究所客員研究員とし、カルチャーセンター等への出講を行なっている他、「大船渡漢字探検隊―漢字あそび大会」でも講師に招いた。

### 学術事業

二〇一二年度の主な研究・活動業績

〈運営委員〉

○加地 伸行

著書 中国論理学史研究―経学の基礎的探求（研文出版 二〇一二年九月）

年九月）

○芳村 弘道

論文 『乾隆四庫全書無板本』所収『江湖集』の鮑廷博校宋本識語

について、立命館文學、六三〇、二〇一三年三月

書評 住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』、和漢比較文

学、五〇、二〇一三年二月

訳注 董康『書舶庸譚』九卷本譯注（五）、立命館白川静記念東洋

文字文化研究紀要、六、二〇一二年七月

研究発表 宋版『錦繡萬花谷』傳本考、第二届中国古典文献學國際學

術研討會、二〇一二年四月二七日

『乾隆四庫全書無板本』所収『江湖集』の鮑廷博識語について、  
国文学研究資料館 宋版研究会平成二四年度第一回研究会、  
二〇一二年一月二十五日

講演 陽明文庫の漢籍について、陽明文庫講座 今にいきづく宮廷

文化、二〇一二年一月一六日

白川静先生の学問形成、福井ライフアカデミー漢字文化講座

「白川文字学を学ぼう」、二〇一二年一〇月六日

《全唐詩逸》成書以後在日本發現的唐詩佚存資料、東呉大學

國學講座、二〇一二年四月二六日

○萩原 正樹

論文 国内所蔵稀見『詩余叢譜』三種考、風絮、九、二〇一三年三月

森川竹礫年譜稿（中）、学林、五六、二〇一三年一月

唐宋詞の名句―『草堂詩余』から、アジア遊学 東アジアの短詩形文学、一五二、二〇一二年五月

講演

白川静先生の古典文学研究―詩経研究を中心に、福井県漢字

文化講座「白川文字学を学ぼう」、二〇一二年一月二五日

白川静先生の古典文学研究―詩経研究を中心に、福井県漢字

文化講座「白川文字学を学ぼう」、二〇一二年一月二八日

唐宋詞名篇鑑賞、中国理解講座、二〇一二年一月二七日

唐宋詞―純粹なる抒情の世界、第三〇二三回土曜講座、

二〇一二年七月二一日

○上野 隆三

研究発表 「關於四川省廣元市鮑三娘墓的考察」、「中国学と物質文化」

国際学術学会、京都大学、二〇一二年五月一日

〈客員研究員〉

○高島 敏夫

テーマ…漢字の構造

○笠川 直樹

テーマ…『説文解字』の研究

○佐藤 信弥

テーマ…西周期における祭祀儀礼の研究

○馬越 靖史

テーマ…金文における曆の研究

○阪谷 昭弘

テーマ…古代神話・甲骨文字

○小寺 誠

テーマ…小学生の漢字に関する疑問に答えることによる（小学生の）漢字理解の深化

○津崎 幸博

テーマ…白川文字学

○後藤 文男

テーマ…「漢字の系統的指導法の開発」白川文字学による漢字教育

### 『白川学ハンドブック』（仮称）刊行近づく

白川学の世界は広大であり、また、その内容は中国古代学の相当の知識を必要とする。その上、白川静の文体は独特であり、読み慣れないと理解が十分でない場合がある。そこで、白川学を理解するための小辞典（平凡社）を編集中であり、最終段階となっている。おそらく今年の十月には刊行されるであろう。ぜひ、この辞典を利用していただきたいと思う。

# 立命館白川静記念東洋文字 文化賞の選考結果について

## 〈第六回〉二〇一一年度募集分

### 立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

蘇 氷 氏

(北海道文教大学教授)

#### 受賞理由

白川文字学の一般的普及を目的とした『常用字解』を正確に翻訳し、かつ「導読」一章を設けて白川静の学問を深い尊敬の念をもって世に紹介した本書は、白川学の普及における業績大であり翻訳もすぐれている。

#### 受賞者の声



中国語の四字熟語「抛磚引玉」は「煉瓦を投げ捨て、玉を引き出す」という意を持つ。「立命館白川静賞」を受賞し、大変な光栄と喜んでいるが、素晴らしい仕事をしていると思つたことはなく、名言「翻訳は悔いを残す仕事だ」が度々頭をよぎつた。去年より、台湾や中国大陸において白川先生の著作が次々と翻訳され、現在出版予定の作品もあると聞いているので、煉瓦の後に、綺麗な「玉」光が見えると信じている。

# 立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

山 元 宣 宏 氏

(宮崎大学専任講師)

#### 受賞理由

書体はその形式上からの研究が普通であるが、山元氏は中国思想史上の今古文論争の政治性を深く追求し、隸書とは、古文学派が今文学派の文字を貶めた呼称とする新鮮な説を提起した。広い視野と緻密な論証とは将来の研究の大いなる飛躍を示して余りある。

#### 受賞者の声



私が白川先生の著書で最初に読んだのは『漢字百話』でしたが、いまでも漢字研究に興味を抱ききっかけになったと思っています。それ以来、白川先生の著書を通じて知的好奇心を刺激する多くの機会をいただきましたので、白川先生への学恩に対する感謝の気持ちには深いものがあります。今後も文字文化に携わる者として、この賞の名に恥じぬように研鑽と努力を積み重ねて参ります。



蘇氏、受賞の様子



山元氏、受賞の様子

## 立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞特別賞

## 福井県立嶺北特別支援学校

(旧・福井県立嶺北養護学校)

## 受賞理由

障がいのある生徒への教育方法として、甲骨文・金文の絵画的性格を活用し、国語の書道ならびに芸術的感動を一体化した教育を行ない大きな成果を挙げている。この勝れた教育例は、全国の障がい児教育に普及する可能性が大である。

## 受賞者の声

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所という歴史と伝統のある研究機関に自分たちの活動が認めていただけたということは大きな自信となりました。本校の生徒たちの書の技術や技巧を超えた原初的な線の美しさや力強さの源になっているのは、万人が等しく持っている表現への欲求であり、自然物や人間の営みと深く結びつき成立してきた文字の原初的なフォルムと魅力が生徒たちの琴線に触れるからだと考えます。「漢字・書道・感情表現」を一体化した教育方法』の実践研究に今後もしっかり進んで参りたいと存じます。先行研究や先達の少ない分野でもありますが、その分、自由な発想でチャレンジできる分野でもあると思っています。



福井県立嶺北特別支援学校の皆さん

## 〈第七回〉 二〇二一年度募集分

## 立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

張 莉 氏

(同志社女子大学准教授)

## 受賞理由

対象となる業績の一つである『白川静文字学的精華』は白川静先生の業績(釈史、釈文)を中心に中国語に翻訳し紹介した上で、客観的な立場から解説している。翻訳の精度も高く、白川文字学の普及という側面において顕著な業績であることが認められる。

## 受賞者の声



文字学の勉強を始めて、最初は中国の文字学者の本を読んでいたのですが、白川文字学に出会い、文字の意味に対する多くの疑問が解けました。それとともに、白川博士の篤実な生き方に感銘を受けました。ところが、中国ではまだ白川文字学についてその成果が十分に認知されておらず、そのために『白川静文字学的精華』を中国で出版することを思いつきました。この翻訳を通じて白川文字学の正しい評価をしてほしいと願っています。受賞を機に、微力ながら中国と日本の文字学の架け橋になれるようがんばりたいと思います。

## 選考委員

委員長 加地伸行

委員 上野隆三・下中美都・萩原正樹・芳村弘道(五十音順)



## 「名誉漢字教育士」授与式・追贈式 の実施について

〈武田鉄矢氏への授与〉

この度、当研究所は、「漢字」への造詣が深く、ときにはメディアを通じて「漢字の成り立ち」を解説されている俳優の武田鉄矢氏に、「名誉漢字教育士」の称号を授与した。この度の授与は、子どもたちの国語力を育み、地域社会、日本社会を元気にしたいという、武田氏のかねてよりの提言と活動とが、「漢字教育士」の本義に通じるとして決定したもので、授与式は、二〇一三年四月一八日、大学・研究所関係者立会いのもと、都内にて執り行われた。また、この授与式に先立ち、加地伸行研究所前所長との特別対談を開催した。

〈白川静名誉所長への追贈〉



白川静名誉所長のご遺族である津崎幸博、史夫妻

二〇一三年六月六日、白川静名誉所長への名誉漢字教育士認定証追贈式を実施した。服部健二所長よりご遺族の津崎幸博、史夫妻に名誉漢字教育士認定証書が贈られた。史氏は「生前、白川は自身の研究成果が広く世に広まることを望んでおりました。このような資格を頂き、白川も喜んでいることと思います。」と語った。

## 名誉漢字教育士 授与記念特別対談 武田鉄矢×加地伸行

〔Z会「名誉漢字教育士」授与記念特別対談HPより一部抜粋〕

武田…僕が一番驚いたのは、「女」という字が動き出したときです。漢字に出てくる女がただの女であるはずがないという、断固たる白川教授の口ぶりね。汗を流して祈れば、もう「汝」としか言いようがない抽象性の高い人物になる。その女の祈りごとを辞めさせようとする「怒」る。力添えしてあげると懸命に「努」力すると…。もう女がどんどんどん動き始めるんですね。

加地…ずっとつながって説明をなさっているんです。だから、読む方も引きずり込まれていくんですね。

武田…しかも困ったことに、体験したこともないような、字の源にある世界が動いて見えるんですね。

加地…古代の世界が持っていた祭祀とか、悪霊とか、そういうものの周りにある共同体性といえますかね。

武田…ここでも共同体が出てくるんですね。

加地…神々が関わっていて、つながりをもたせる。そういう共同体がそこにあるわけです。おそらく武田さんがスツとお入りになれたのは、お持ちになっているキャラクターの共同体性みたいなものによるのではないかと勝手に想像してしまっていますが。

武田…基本的には人間なんて…とは思っていて、個人なんて実につまらないんですけど、ただ、そのつまらない人間が三人、四人になると、ものすごく有機的に面白いものになっていくんですね。

加地…そういうつながりを武田さんは単なる理屈ではなくて、よくとらえてらっしゃると思います。「世界一受けた授業」という番組（に講

師として出演されているのを幾つか拝見しましたが、あれはほとんど白川説をもとにしていらっしやるのでしょうか。

武田…もう、全部白川説です。テレビ局として「諸説あります」とは入っていますけどね。さらにテレビ局は(タイトルに)「本当は怖い」とつけたがるんですけど、怖いというより白川説には肌触りが、肌理があるんですよね。感触がある。成田空港などで団体行動をしている旅行者を見ると、全部「遊」という字に見えるんですよね。旗を持って、遊ぶという字が次々通過していくような。そんな面白さといえますかね。

昨日まで僕、ベトナムにいたんですよ。ベトナムは今、日本ブームなんですけど、あそこもかつては日本と全く同じ歴史をたどりながら、漢字を捨てちゃうんですね。彼らが名前は(聞いても)すごくわかりにくいですが、よくしたもので名前を漢字で言うとうわかりやすくなる。僕は「平(たいら)」だからベイだと。ベトナム語を教わる場合も同じで、たとえば「ありがとう」は「カムオン」というから、英語のカモンで覚えてくださいって言う。でも、いざ使おうとすると英語のなんだっけ?ということになってややこしいんです。そこへ頭のいいベトナムの若者が、カムオンというのは漢字で書くと「感じる恩」だから、「感恩」といえば通じます。そっちのほうがはるかにわかりやすいですよ。

加地…ちなみにベトナムの首都ハノイは、中国語で「ホーネイ」すなわち「河内」なんですよ。

武田…はあ。すぐにわかりますよね。我々は地形から、匂いから、全部判断できる。白川教授も漢字ほど便利な文字はないと。僕ね、不思議でしょうがないんですけど、白川説に従って漢字の源を尋ねるでしょう。するとものすごくわかるんですよ。なんでわかるんだろうと考えたことがあるんですけど、それは漢字の源というのが風景として日本にくらでもあるからじゃないかとね。

加地…確かにそう思います。

武田…前から不思議だったんですが、浮き沈みの「浮」という文字の中に子どもがいるでしょう。なんで子どもがいるのか不思議だったんですよ。それが白川教授によれば、水の中に一回子どもを浸けたんじゃないかと。そうすると生命力のある子は浮かび上がってくるから、生命力のある子を育てようという。それが儀式であれ、生命力を試すものであつたと。次に流行の「流」という字。あれも白川説に従えば、右側に広がっているものは髪の毛で、あれは子どもを流しているのだと。水に子どもを浸け、子どもを川に流す。それで生命力を試す。そういうことが古代にあったのではなからうかと。聞くとおどろおどろしいんですけど、日本には「桃太郎」というわかりやすい例があつて、川から子どもが流れてくるんですね。しかもこの子は異能な子で、普通の人間にはできない、鬼を退治する

というスーパーパーワーを持つている。「浮」という字と「流」という字が桃太郎に重なりとすごくわかりやすくなる。漢字はもともと中国のほうで生まれたのに、かくも日本人の我々にびたりとくるとはね。



全文はZ会「名誉漢字教育士」授与記念特別対談ホームページに掲載。  
(<http://www.zkai.co.jp/ca/kanji/sp/index.html>)